

## 牛群検定通信 No168

### ～ 栄養管理と観察方法（4） ～

先月号に引き続き、栄養管理と観察方法についてのお話です。今回は体表面の毛艶についての話でしたが、今回は、毛色、斑紋とフケについて述べていきます。

毛色は肝臓など内臓の状態を示すのではないかと考えており、毛の色が茶色になっているのは、単なる糞尿による汚れではなく、肝臓や他の内臓が弱っている証拠であると考えています。この茶色の毛色は白色が多い斑紋の牛では直ぐに分かりますが、黒っぽい牛ではなかなか見分け難いものです。しかしながら、観る角度を変えてみたり、肋骨の辺りを斜めから観たりすると黒毛の所が赤茶色になっているので分かります。

肝機能低下の症状が軽度の場合は、茶色の色が薄く、後躯がやや茶色になっている程度ですが、重傷になるに従い体全体が濃い茶色になってきます。ケトーシスに係り、肝臓に脂肪の蓄積が多くなり、肝機能が大きく低下してきたりすると、毛色は更に濃い茶色になります。また、茶色の色は症状が重くなるとともに牛体の後ろから前へと移ってきますので、亀甲部や前躯が茶色になっている牛は色の濃さにかかわらず、重症と判断します。

更に、腎臓の機能が低下し、尿に蛋白が出るような状態になると毛色は非常に濃い茶色になるとともに、被毛はボサボサになってきます。

ただ、後躯や腹部だけが茶色になっている時は、ふん尿で汚れているのか、肝機能が弱っているのか、他の要因も見比べて見極めることが必要です。

尾房が濃い茶色になっている場合、大抵は肝機能が低下していることが多く肝機能低下で茶色になっている場合は、石鹸で洗っても茶色はとれません。余談ですが共進会などで牛体はとてもきれいであっても尾房が茶色い牛がいますが、これは肝機能が弱っている証拠でどうしても活力に影響を与えています。栃木県で開催されたホルスタイン全国共進会の経産牛の部で序列がついた時に一位の尾房は真っ白で、それ以後序列に従ってだんだんと尾房の色の茶色が濃くなっていったのをはっきりと覚えています。全国共進会ですから、かなり手入れをしたと思うのですが、体の内部からの色であったため、洗っても洗っても色が落ちなかったのだらうと思っています。

また、斑紋の白と黒の境が鮮明かどうか、ということも牛の体調管理の一つの目安になります。白と黒の境がすっきり鮮明なものが良く、不鮮明なものはどこか調子を崩しているか栄養過多の場合がありますので、詳細な観察が必要です。更に、白い部分がくすんでいるときは何らかの代謝疾病にかかっている可能性が高いと思われまますので、他のチェック項目もよく観察して手当が必要です。

一方、背中にフケやほこりがある牛は、吸収タンパク質やビタミン不足であると考えられ、栄養状態から見るとタンパク質が少しだけ足りない状態であると思われまます。このため、フケのある牛は泌乳ステージ、肉付きや毛艶などを勘案しながらデンプンやタンパク質を増やすかどうか、また、ビタミンAを含むビタミン剤の給与を増やし、強肝剤なども給与するなどの対策を行わなければなりません

(渡邊)